

### 2020年12月12日 オンライン授賞式

#### ゴールドアーティクル賞 & イノベーション賞 2冠達成

社会教育の取組を評価、共有し、そして社会教育の価値を幅広く外部へプロモーションすることを目的に昨年度創設されたJAPAN SOCIAL EDUCATION AWARDS (以下アワードという)。革新的で未来を感じさせる取組を行っている実践者を『イノベーション賞』として表彰。また、誌面に掲載された魅力的な原稿の中から、読者の関心が高く取組の参考や影響を受けた記事を『ゴールドアーティクル賞』『シルバーアーティクル賞』『ブロンズアーティクル賞』の各賞として制定した。

実行委員会により、本誌の2019年4月～12月号に掲載された記事の中から9本の受賞候補作が選ばれ、10月にインターネット上で読者投票が行われた。全国各地から数多くの投票が寄せられ、各賞の受賞者が決定した。コロナ禍の影響もあり今年度の授賞式はオンラインでの初めての開催となった。社会教育のキーパーソンが一同に集った授賞式では、社会教育のこれからを考えるためのヒントが多く語られた。その授賞式の模様をお伝えしながら、社会教育の未来について考えていきたいと思う。



#### イノベーション賞

認定NPO法人カタリバ

菅野 祐太



#### ゴールドアーティクル賞

被災地大槌から感じた  
高校生への社会教育の可能性

認定NPO法人カタリバ 菅野 祐太



2019年10月号



## 「このコロナで地域にとらわれない 新しい社会教育の可能性を感じている」——菅野 祐太

### 社会教育の重要性を伝える 新しいチャレンジが必要

今回、『イノベーション賞』と『ゴールドアーティクル賞』を受賞した菅野祐太さんは、東日本大震災の被災地である岩手県大槌町で、高校生が自らプロジェクトを立ち上げ、被災地の課題解決に向けた取組を行っている。インターネット投票では、被災地での取り組みを評価する一方で、菅野さん自身の人を引き付ける魅力や社会教育への情熱について評価する声も多かった。

菅野さんは授賞式の中で、「被災地において社会教育が救った命がたくさんあったと感じている」と語っていた。地域の繋がりがあつたから避難ができたという防災の面だけでなく、復興の過程で子どもたちの活動を支えていこうとする地域の社会教育的素地があつたからこそ、今の復興が成し遂げられたということを感じたそうだ。

また今回のコロナ禍において、

社会教育の新たな可能性を感じているという。コロナでの臨時

休校の際、学校はなにもできなかった。そのときに生徒たちがZoomなどのオンライン会議のツールを活用し、哲学対話をはじめた。そして東京大学の牧野篤先生と話がしたいとオンラインを通じて交流が生まれたという。これまでは実際に会って繋がり合うことが社会教育のセオリーだったが、今回のことで、リアルに関わりあうことが難しい方々と繋がりを持つことができた。また生徒たちが今困っている人のためにこういうことを一緒にやりたいと全国各地の社会教育の関係者に個別に相談するという動きも生まれてきているという。社会教育はこれまで地域というものの影響があつたが、地域に捕らわれない社会教育の新しい可能性が生まれてきていると語った。

一方で社会教育の課題について、その取組に高校生などの若

#### シルバーアーティクル賞

舞台を通した中高生の居場所づくりが、  
地域や世代をつなぐ循環型生涯学習の場に変容した

大阪狭山キムジナーの会 田中 晶子



2019年11月号

者が接する機会があまりないと感じているという。この課題を解決するためには、本誌のような紙のメディアによる情報発信だけでなく、いろいろなメディアや方法を駆使しながら、社会教育の重要性を伝えていくための新しいチャレンジが必要だと語っていた。

### 先生に社会教育の力を 知ってもらうことがスタート

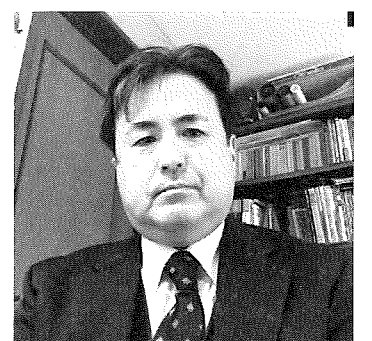
菅野さんと同じく中高生を対象とした取組を長年、公民館を舞台に行ってきたのが、今回『シルバーアーティクル賞』を受賞した田中晶子さんだ。



シルバーアーティクル賞を受賞した  
田中晶子さん

### 学校と地域の連携が 次の社会教育のトレンド

その学校に社会教育行政から異動して、日々奮闘しているのが『ブロンズアーティクル賞』を受賞した井上昌幸さんだ。地域と学校の連携について、学校は「社会に開かれた教育過程」というものを目指して



ブロンズアーティクル賞を受賞した  
井上昌幸さん

いる。地域学校協働活動を含め、学校と地域の連携が次の社会教育のトレンドになるのではないかと語った。連携の仕方については、学校が地域に入り、そこから地域づくりを行なうことがこれから重要になってくる。その時大事なことは、社会教育だけでなく、まちづくり施策など他の取組と連携協働していくことがポイントになるだろうと語った。

くしくも受賞者が皆、中高生などの若者と社会教育への関わりについて語っていた。このことが社会教育の未来を考える次のヒントとなるだろう。

## 新しいカタチのアワード

Japan social education awards 2019

今回のアワードはコロナ禍の影響もあり、初のオンラインでの開催となった。今回の実験的な取組はまだまだ改善する点も多いが、それ以上にオンライン活用によるメリットを感じるこ

とができた。まず投票をオンラインで簡単に投票できるアンケートフォームを利用したことで、昨年度を上回る多くの読者から投票があった。また全国からさまざまな経歴や年齢層の人たちの参加があり、結果として多様な人たちが



編集部の会議室で、授賞式の運営は行われた

の意見をアワードに反映することができた。また授賞式自体がオンライン開催となったことで、受賞者が一同に会する式を開催することができた。今回の受賞者は、岩手県、栃木県、大阪府と全国各地から選ばれた。実際に会場で実施するとすると、受賞者の負担が多くなり、すべての受賞者が揃うことは難しかっただろう。今回の授賞式の形も菅野さんが言っていた地域にとらわれない社会教育のひとつの形だと言える。

そして、イベントを運営するために、これまでなら会場を抑え、セッティングをし、受付など当日多くの人の手を借りなければ開催が難しかった。今回の授賞式当日の運営は、司会の近藤編集長を含め、3名の実行委員会のメンバーが中心となり実施した。少人数でイベントを運営できるのもオンラインの魅力

力でもある。

一方でオンラインのイベントを実施するためには、通信環境の整備や機器の準備、オンライン会議ツールの使用法の習得など越えなければならぬ最初のハードルは確かに高く感じるだろう。しかし一度そのノウハウを学んでしまえば、会場を借りて、イベントを開くよりも手軽に開くことができる。

授賞式では社会教育の重要性を伝えるための新しいチャレンジの必要性が語られた。オンラインの活用は、これからの社会教育のひとつの大きな流れになるだろう。オンライン開催が絶対とは言わないが、選択肢のひとつとして、常に考える姿勢は大事だろう。なにより、新しいことにチャレンジするために学ぶ姿勢こそ、社会教育で一番大切なことなのではないだろうか。まずはできることから一歩ずつはじめてみよう。

## ブロンズアーティクル賞

連載  
社会教育行政職員のための施策立案の  
「虎の巻」第30回（最終回）  
社会教育行政に携わるといふこと

栃木県立足利工業高等学校定時制  
教頭 井上昌幸



2019年10月号



### 今回使用したオンラインツール

**Zoom** (オンライン会議ツール)  
有料アカウント (PRO) を使用  
無料版は3人以上のミーティング  
を行う場合45分の時間制限がある  
ので注意が必要  
有料版は時間無制限  
使用者のバージョンが古いと、主催者の設定が反映されないため、常に最新版を使用してもらうよう、事前のアナウンスが必要

### Googleフォーム

会員登録などは不要で、無料で使用できる。  
アンケートや投票など目的にあったテンプレートが用意されており、簡単な操作のみでシートが作成できる

### JAPAN SOCIAL EDUCATION AWARDS 2019 投票フォーム

＜投票期間＞  
2019年10月1日(水)～10月31日(土)  
＜投票方法＞  
1. 投票用紙をダウンロードし、印刷して記入する。  
2. 投票用紙を封筒に入れ、〒100-0001 東京都千代田区千代田1-1-1 社会教育振興会事務局へ送付する。  
3. 投票用紙の記入方法は、封筒の裏面に記載されている。  
4. 投票用紙の記入方法は、封筒の裏面に記載されている。  
5. 投票用紙の記入方法は、封筒の裏面に記載されている。  
6. 投票用紙の記入方法は、封筒の裏面に記載されている。  
7. 投票用紙の記入方法は、封筒の裏面に記載されている。  
8. 投票用紙の記入方法は、封筒の裏面に記載されている。  
9. 投票用紙の記入方法は、封筒の裏面に記載されている。  
10. 投票用紙の記入方法は、封筒の裏面に記載されている。

設問を入力するだけで、アンケートが完成